

## ヒトにおける強制選択場面と自由選択場面の選好

## — 遅延および提示法の効果 —

Preference between forced choice and free choice in humans:

Effects of delay and presentation method

○ 今関 仁智・小野 浩一

Masatoshi IMASEKI and Koichi ONO

(駒澤大学大学院人文科学研究科・駒澤大学文学部)

Komazawa University

選択肢が1つの強制選択場面と選択肢が複数の自由選択場面の選択では、同一の結果がもたらされる場合には、自由選択場面への選好が一貫して示されてきた(Cerutti and Catania 1997; 坂上・牧瀬 1998)。

本実験では、基本的には強制選択場面と自由選択場面間の選好について検討するが、自由選択場面に同時提示(複数の選択肢を同時に提示する)と継時提示(1つずつ順番に提示する)の2つの条件を設けた。さらに、場面の選択から実際に選択肢1個あるいは5個が提示されるまでの遅延時間として5秒と15秒の2つの条件を設定し、選好に与える影響を検討した。

## 方法

## 被験者

駒澤大学文学部心理学科の男子学生10名、女子学生10名の合計20名(平均年齢22.5歳)であった。

## 実験装置

ノート型パーソナルコンピュータのモニターを選択肢表示画面とし、表示されている各選択肢へのマウスクリックを選択反応とした。プログラムはVisual Basic.NET 2003で作成した。

## 実験条件

本実験では100円から1000円までの100円刻みの10種類の金額ボタンを選択肢とした。そのうちの1個(たとえば600円ボタン)のみが提示されるのが強制選択、5個(たとえば、200円、600円、300円、500円、800円)が提示されるのが自由選択である。観察される両選択肢の期待値は等しくした。自由選択はさらに2条件に分かれ、同時提示は5個の金額ボタンが同時にモニター画面に表示される。一方、継時提示では金額ボタンは一定の時間間隔で1個ずつ順に表示される。この時間間隔は遅延短条件として5秒、遅延長条件として15秒を設定した。従って、実験条件は自由選択の選択肢提示法2(同時・継時)×遅延時間2(5秒・15秒)の4条件になる。

## 手続き

各選択肢試行においては、強制選択ボタンには「1個」という文字、自由選択ボタンには「5個」と「同時」あるいは「順番」の文字、両者に共通して「早い」か「遅い」の文字が表示された。被験者が強制選択ボタンを押すと、たとえば遅延が15秒ならば、15秒後に金額ボタンが1個表示された。自由選択ボタンを押すと、同時提示ならば、15秒後に金額ボタンが5個表示されるので、そこで金額の選択をする。継時提示の場合は、15秒後にまず1個、その15秒後に2個目のように順次提示されるが、被験者は最

後の選択肢まで見てもよいし、また提示途中での選択も可能であった。6試行の練習試行に引き続いて、上記の4条件をそれぞれ10試行ずつランダムに行い、合計40試行おこなった。

## 結果

Fig.1は4つの条件における自由選択場面に対する選好である。縦軸は各条件(10試行)において自由選択を選択した試行の平均値、横軸が遅延条件、◆が同時提示条件、□が継時提示条件である。

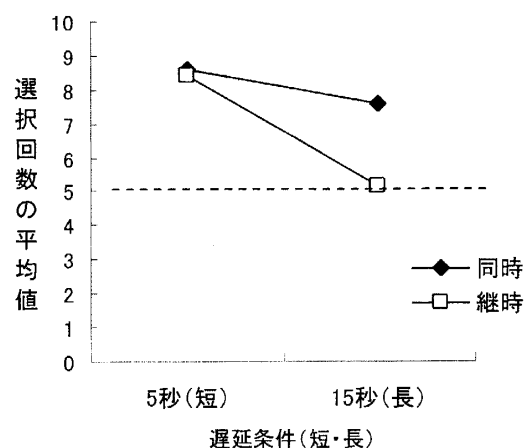


Fig.1. 各条件の自由選択場面に対する選好

Fig.1から全体的に強制選択場面よりも自由選択場面に対する選好が認められ、特に遅延短条件と同時提示条件において強い選好が認められた。2×2の分散分析をおこなったところ、遅延条件では1%水準で( $F=14.79, df=1, 76, p<0.01$ )、また、提示方法条件では5%水準で有意差が認められた( $F=5.75, df=1, 76, p<0.05$ )。さらに、5%水準で交互作用が認められた( $F(1,76)=4.32, p<0.05$ )。

## 考察

本実験の結果から、強制選択場面と自由選択場面の選択では、全体として自由選択場面に対する選好が認められた。この結果は、遅延が短く選択肢が少ない選択場面よりも、遅延は長い選択肢が多い選択場面に対する選好を示唆している。しかし、この点に関しては提示する金額ボタンのアレンジが選好に与える影響が考えられ、更なる検討が必要である。また、提示法の違いによって自由選択場面に対する選好に差がみられた。この結果は、多くの被験者が、継時提示で選択肢の提示途中で最終選択をせずに、全選択肢が提示されるのを待ってから最終選択を行ったことに原因があるのではないかと考えられる。